原野わがふるさと

上

早船ちよ

理論社

ふるさと 上

早船ちよ

小説国民文庫

原野わがふるさと（上）

© 1965年6月　第1刷

定価380円

作者　早船ちよ

発行者　小宮山量平

東京都千代田区神田神保町一の64

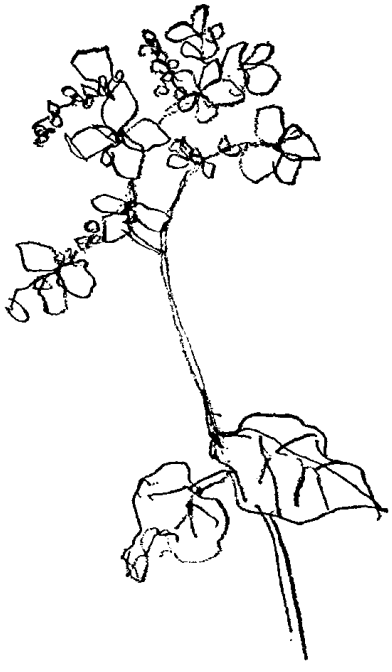
発行所　株式会社 理論社

電話 東京(291)5668-9

振替口座東京95736

印刷 誠和印刷

製本 橋本製本所



まえがき

開拓村は、クシロ原野の奥地、阿寒山岳地帯の南ふもとにあります。

ここへ、明治のおわりか、大正のはじめごろに、長野、富山、岐阜、山形、福島、和歌山、香川……などから、ひとびとは家族うちつれて、または、何家族かの団体で、または、分村して、入植してきました。それぞれ、わがふるさとのことばなまり、暮しかたから、産土神（うぶすな）のお社まで背負って、原始林のなかへわけ入って、十ヘクタール単位の開拓に着手したのでした。

そこには、それよりさきに、この土地の主人公であった、先住民とよばれる狩猟民族もいました。

ひとそれぞれに、——あなたにも、わたしにも、《わがふるさと》があります。

開拓二代め、三代めの青年たち、こどもたちのふるさとは、いったい、どこでしょう。

雄阿寒、雌阿寒の美しい山姿に、タンチョウヅルの舞いまう《原野わがふるさと》には、日本じゅう各地のことばがいりまじって、いつか独特のことばになっています。このことばは、日本のどこから行った人びとにも通じるひびきをもっています。

原野っ子は、この開拓地のことばと、開拓のこころに、そだてられました。

原野。——愛する《わがふるさと》よ。

火山灰土のヤチ（湿地帯）と、つめたいガス、雪。三年にいちどはくる冷害ともたたかって、人びとは、きょうも、未開の大地へいどんでいます。

平和日本の、新しい農業をきずくために。

ゆたかで、幸せな暮しが営まれますように——。

1965年6月

早船ちよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

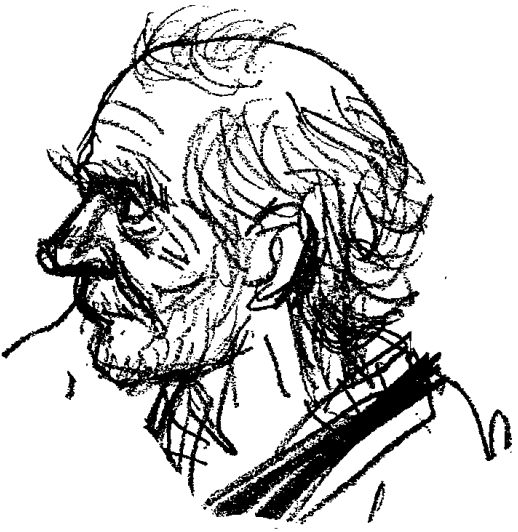
原野わがふるさと

＊冬のメルヘン＊

もくじ

まえがき／1
1　裸馬にのる娘／7
2　馬をだいじに／39
3　ゆるくない仕事／55

4 チルワツナイの小屋／76
5 赤いカーディガン／93
6 牛乳風呂／131
7 月明のツル／147
8 幸福をもってくるツル／170
9 生きるなら、生き返るべし／192
10 ムエンヌケ会議／205
11 春がくるまで／240



そうてい・さしえ／久米宏一

1　裸馬にのる娘

ぱらぱら、ぱらぱら――かわいた雪が舞いおちてくる。

降りはじめて、これで三日め。あとから、あとから、乾いた雪片がふりつづいて止みそうな気配がない。例年雪の少ないこのクシロ原野にしては、めずらしいことだ。

ガンケ（崖）下の野呂寅吉は、さきほどから、カンカンに凍れた大地に足をふんばって立ち、大空にむかって悪態をついている。

「やい、雪！　雪のつくそう！　てめえ、止む気か、どうか」

うす曇りの空は、なんとも無愛相な面がまえで、冬枯れの原野いっぱいに、ぶわっと、かぶさっている。

やりきれない陰鬱な暗さ――わずかに、日輪の

かかっているあたりだけに、にぶい明るみを見せているものの、そのしみったれた光さえも、地上へとどかないうちに、弱よわしく呆けてしまう。

「雪め！　やい、もっと降るつもりだな。ようし、てめえがそのつもりなら、こっちも積もらねえうちに、山さ入らねえと……」

雪がつもらないうちに、原木伐りのデメン（日やとい）にはいらないと、寅吉の一家は、妊娠八カ月の妻のフミも、十歳の多鶴江を頭に、七歳の茂、五歳の武も、かつえてしまう。

――なにしろ、この夏からの冷害は、ゆるくなかったもんな。ひと夏じゅう、ひるまも、ルンペン・ストーブを焚きどうしだった。セーターを脱ぐまもないうちに、冷たい夏は、短い秋になり、冬はもう駈け足でやってきている。これでは、換金作物の雑穀の大豆、小豆、サイトウも実の入りようがなかった。

米麦が、ぜんぜんとれない北海道根釧原野で、ソバの収穫が半減したのは何としても痛い。――年があければ、来年の昭和28年は、九周年寒冷説の寒い年に廻りあわせている。

北海道新報は、寒流異変を、でかでかと書きたて、二年ごしの大冷害を予告している。

――そういえば、なんとも不景気な日暈がかかってるだ……あの暈が、日の光をとおさねえんだべ……。ちっ。

いまいましくなって、つばを吐いた。そのとき、ガケ下の開拓小屋の戸口から、長女の多鶴江がのぞいた。

「おうーい、とうちゃん、おうい！」

返事がない。多鶴江は、着ぶくれたからだで、ころがるように、街道までかけてくる。

「とうちゃーんてば！」

「なした？」

「かあちゃん呼んでるど」

「なしてだ。うるせえ」

寅吉は、いつもの怒ったような口調で、こたえる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「漬けもん石、上げてけれって」
「漬けもん石だと、ちくしょう。いちいち世話のやける女だ」
ちっと舌うちして、家へ向かって歩きだそうとして、「ああっ」と、目をあげた。
原野をつらぬく一本みちを、まっしぐらに馬がとんでくる。
「馬だ、見ろハ」
馬は、全速力でかけてくる。20センチ近くつもった雪をけちらし、けちらし、人も、馬も、目にもとまらぬ早さで、近づいてくる。
「あ、女のひとがのってるよ、とうちゃん。やあ、や、や！　谷川牧場の才子さんだよ」
娘は、さっと、ムチをあげて、ピタリと、馬をとめた。ぱあっと、雪煙があがる。
「おはよ！　ガンケ下、多鶴江、そんなところで何をしてるの」
男もののアノラックのフードを、ぱっとはねのけて、馬上から笑いかけた。汗ばんだ十八歳のほおをほてらし、息をはずませている。
むかし、このあたりで、馬大名とまでうたわれた谷川牧場主、谷川駿次郎の、十二人兄妹の三番めの娘である。
「才子だべ。おめえこそ、こったら早く、どこさ、いってきた」
「ふふふふふ」
娘は、いたずらっ子のように含みわらいをしてから、はっきりと、いってのけた。
「牛の人工受精によ、寅さん」
「なんだって……おめえが？　ほんとかあ」
「そう、たのまれたもの」
娘は、寅吉を、まっすぐに、見おろして、
「ばかにしないで。わたし、これでも、受精士の免状をとっているのよ」
「へええ……なんとも、たまげたあねっ子だもんだ。裸馬さのって、牛のタネつけに出かけるなんて、まンず、まンず、おっそろしい、あねっ子だもんだ！」

寅吉が、腹の底からうなった。その顔をみて、才子と多鶴江が、声をあげて笑った。
「才子さん！　ねええ！」
多鶴江が馬の腹にすりよるようにして、才子を見あげ、甘ったれ声で、鼻をならす。
「ねえ、え。才子さん。これから、どこさ行く、馬で？」
この一本道をつっ走れば、谷川牧場と反対の向き――ツルのくる川をこえて、ムエンヌケの丘へ――薪炭備林をすぎて、ミズナラの樹林をぬければ、流れがあって、そのむこうは山だ。阿寒山岳地帯へつづく山また山が、つづいている。
「ああ、あのねえ、山までいこうと思うの」
「山？　なして、山さ行くう？」
「馬を見に。放牧馬が、どのへんに遊んでいるか、ひとまわり、調べておかんとね」
「どうして？　どうして、馬っ子調べなきゃいけないの、才子ねえさん」
「それはね、多鶴江。ラジオ聞いた？　こんどの雪は、五十年来の大雪になるって……」
「くそっ！　ラジオのぬかすことなんか……」
寅吉の開拓小屋には、まだ電燈がひいてないのだ。
「大雪になんか、こられて、たまるかって。夏は冷害で、ソバさえ、ろくすっぽ実らねえに……」
才子は寅吉にはとりあわず、多鶴江にむかって話しかける。
「ねえ、多鶴江……雪が、どんど、どんどと積もってさ。原野にも、牧草地にも、ヤチにも、つもってさ。ヤチハンの木も、カラマツも、ミズナラも、どんど、どんどと埋めちゃったら、馬っ子どうなるべ」
多鶴江は、ちょっと首をかしげて考え、
「わしが馬っ子なら、うれしい。とんで、はねてあそぶよ、友だちと馬と」
「ははははは。ところが、寒ざらしの馬たちは、ひづめで雪をかいて雪の下のクマザサの青いとこ食って、それだけで一冬、食いつないでいるの

よ」
「うん、そんで？」
「雪が、どんど、どんどと降ったら、そして、馬の足さ埋めてしまったら……。それでも、どんど、どんど、馬の首まで埋めちゃって……それでも、雪がふりやまなかったら……」
「ちょっ、えんぎでもねえ……」
「ねえ、多鶴江！　そういうことにならないうちに、馬っ子連れもどしてやらないとね」
「うん」
「だから、馬がどのへんに遊んでいるか、これから調べにいくのよ」
　才子は、ひらりと馬にまたがった。
「わあ、いいなあ、才子ねえさん、つれてって」
「才子ねえさんだって、ははははは」
　才子は、馬上でのけぞって、大笑いする。
「とうちゃーん。のせてもらっていい？　いやーん、のせてってもらうよう」
　多鶴江は、才子のさしのべた手にしがみついて、馬上へのせてもらう。
「いいかい？　多鶴江。しっかり、タヅナさつかまっていないと、おっこちるよ」
　多鶴江は、わらってうなずき、しゃんと胸を張って、寅吉のほうをふりむいて見る。
「あっ、そうだっけよ、才子さん。頼みたいことがある……」
　寅吉は、馬のすぐそばまでやってきて、ぶきっちょに頭を下げ、声を低くして、ささやく。
「あのな、おとうに……いや、馬大名のダンナに、たのんでけれ、原木曳きのデメンさ行くから、馬っ子貸してけれ――とな」
「馬を貸せ？」
　才子は、きっとした顔になる。
「馬なら、寅吉さんちにいるじゃないの」
「あったら、老いぼれのクシロ馬。玉曳きできるかって」
　玉曳きは、山できりだした原木にクサリをまきつけて、馬で傾斜面を運びだす危険しごとである。

「いいわ、おやじに、そういっといてやる。でも、馬の足おったら弁償だよ」
「そったらこと、すっかって。——だが、そのときには、代わりに、うちのクシロ馬ひきとってくれればいい」
「ふふ、ふーん」
才子が、ずるそうにわらった。
寅吉は、いまいましげに、ちっとツバをはいていった。
「もし、足りなければ、ぜんこ打つよ」
「そういっとく、おやじに」
才子は、ぴしっ！ と、馬にひとむちあてた。馬は、ひひーんといななき、まっしぐらに、一本みちをかけていく。
多鶴江が、チラとふりむいた。寅吉は、その顔へ向けて、思いきり、大声でどなりつけるのだった。
「つくそう！ 才子のまねして、あったら、あばずれ女になるなよう！」

*

三十分ちかく、一本道をとばしにとばした。流れに出あったところで、一本みちを右にはずれた。流れに沿ったヤチハンの木の小みちを、ゆっくりと馬を歩かせた。
「あかちゃん、いつ生まれるの」
と、才子は多鶴江をのぞきこむ。
「正月すぎ」
多鶴江は、才子の両うでにかかえられるようにして、裸馬にまたがり、タヅナだけは、けんめいに握っている。
「お産は、あと一カ月ちょっとね」
「うん、正月の七草あたりだべって」
——あと、二カ月足らず。あかんぼうが生まれるまでに、父の寅吉は、原木運びのデメンで、出産の費用を一稼ぎしなきゃ——と、あせっている。
人夫だけで、原木伐りに山へはいれば、日当で八百円。飯場のフトン代、メシ代、道具の借り賃

をさしひかれると、たいした稼ぎにならない。馬をつれての玉曳きなら、原木をクサリでしばりつけて、山の急斜面を馬で曳きだす危険作業だが、二千二、三百円の日当になる。馬の借り賃や飼料、諸掛りさしひいても、これならまとまった金を稼ぎだせるだろう——と、父は多鶴江にもそういっていた。

「うちの馬、見つけたら、連れて帰らにゃ」

多鶴江は、才子を見上げた。

「どうしてさ」

「玉曳きにゃ、あの馬じゃ心細いって——とうちゃんいってたけど……いないよりは、なんぼうか、いいもん」

「クシロ馬だろ——あんたんちの馬」

「いいえ、クロよ、あれ」

ふふっと笑って、才子も、ふと大人っぽい表情になり、あれこれ、才覚を働かすのだった。

——あの年とったクシロ馬で玉曳きできっこないから……やはり、野呂寅吉は、今夜あたり、うちのおやじへ「馬っ子貸せ」と、いってくるだべな。

——なるべくなら、馬を貸すようなあぶないことは、しないほうがいいんだが。寅吉がケガしたり、死んだりしたら、元も子もとれなくなるもの……。

じじつ、そういった事故は、毎年いくつでも起っているのだ。

「あかちゃん、どっちがいい、男？　女？」

才子は、幼いおかっぱの肩ごしに聞く。

「女のほうがいい」

「あら、どうして？」

「だって、わしの下は、茂も、武も、二人とも男だもん、妹がほしいわ」

才子は、それを聞くと、あたりに響きわたる、はでな声で笑いだす。

「あっはっはっはっ、あっはっはっはっは。原野では、馬っ子も、べこも、豚も、ニワトリも……そりゃ、あたしだってメスのほうが、なんぼうい

いか、わからないわ、あっはっはっは！」
多鶴江も、いっしょに笑いながら、
「あのな、あのな、才子ねえさん」
媚びた鼻ごえをだす。——このひとなら、きっと、生まれてくるあかんぼうのために、しっかりした馬を父に貸してくれるように、馬大名のダンナを説きつけてくれるだろう。
「ねえ、才子ねえさん。わしの名は、チルワツナイの上月牧場の先生がつけてくれたのよ、知ってる？」
才子は、だまっている。そのよく動くはしっこそうな目ざしが動いて、流れの曲がりのエゾハンの木の茂みを見ている。
「どうして、多鶴江というか？」
「そりゃ、わかるわ。このツルキ村へは、タンチョウヅルがくるもの。ツルが多く来る村で生まれたから——だべ」
いいながらも、才子は、馬のタヅナをひきしめ、ひきしめ、馬をさらに、のろのろした足どりにしていく。
流れのエゾハンの木の向こうには、ヤチダモの茂みがみえ、川をまたいだサケの監視小屋の前に、ちらっと人影がさした。
「それは、そう……だけど、アイヌ語で、チルワツナイは、鶴が多い沢っていうんだって。多鶴江が、もしもよ。アイヌ・メノコだったら、チルワツナイって呼ぶかな。ふふふふ……ちょっと、おかしいけど、イミはおなじかしらね」
馬は、ぴたりと、止まった。ヤチダモの茂みをわけて出てきて、小走りに近づいてくるのは、アイヌの古老の茅沼仙太郎だった。
多鶴江は、サケの監視小屋のむこうを、三羽ツルがはしるのを、のびあがって見た。——ツルだ。ツルがきている……
「こんにちわ！　茅沼さん、猟にいくの？」
才子は、油断ならぬ目ざしで、茅沼仙太郎の身なり、足ごしらえを、じろじろと見た。
「そっちこそ、どこさ行く？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com